

洗足学園音楽大学
グリーン・タイ ウインド・アンサンブル演奏会
Senzoku Gakuen College of Music
Green-Tie Wind Ensemble

指揮
ティモシー・レイニッシュ
Timothy Reynish

2019. **6.25** 火曜日 18:30 開演
18:00 開場 18:15 プレトーク

洗足学園 前田ホール

 洗足学園音楽大学

洗足学園音楽大学グリーン・タイ ウインド・アンサンブルにお招きいただくのは3度目になります。大変に誇りに思っています。日本の吹奏楽文化はまさに世界中でよく知られています。それは、スクール・バンドでの卓越したトレーニングや、大学やプロ級のバンドを指揮する素晴らしい指揮者などのおかげです。そういった中で、伊藤康英氏は間違いなく最上級の一人であり、その伊藤氏により最後の32分音符やピアノシモに至るまで指導を受けたこの吹奏楽団と一緒するのが楽しみです。

今年のプログラムのテーマは、東洋と西洋です。まず『トッカータ・マルチアーレ』から始めましょう。吹奏楽のための合奏協奏曲という大きな作品の第1楽章として計画されましたが、残念ながら完成しませんでした。しかしこの作品は我々に、独創的なフレーズや、混合拍子そして管楽器の室内乐的なパッセージといった驚くほどの万華鏡をもたらしてくれました。

第1次世界大戦中に、グレインジャーは軍事訓練に参加し、銃剣戦を実践している新兵を観察しました。彼は1918年に『ローマの権力とキリスト教徒の心』を作曲し始めました。それは彼曰く「専制政治と拷問という悲しい状態でとにかく文句を言う」という全体動員に対しての紛争と平和主義の格闘における「不平不満」の反映といえるでしょう。

コンサート前半は、紛争が平和に解決される2つの素晴らしい日本の作品をお届けします。高 昌帥による『マインドスケープ』を、私は、2011年に台湾で開催されたWASBE（世界吹奏楽会議）にて初めて耳にしました。感銘を受けた私は、演奏する機会を望んでいました。

『彼がわたしたちに語ったこと』というオペラ的な作品で、伊藤康英は、古いパリー語によるブダのテキストを使って、紛争が憎しみを解決することはできないと強調しています。

そして後半は、踊りをもとにした2つの作品を一緒に楽しみましょう。

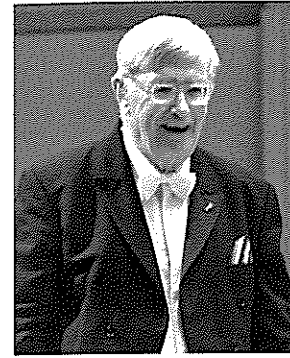
ティム・レイニッシュ
www.timreynish.com

I am proud to be entrusted with a concert as guest Conductor of the Green-Tie Wind Ensemble of Senzuku Gakuen for the third time. Japanese wind culture is rightly famed world-wide, partly because of the superb training at high school level, but also because of the wonderful conductors working with the University and professional bands. Ito Yasuhide is certainly one of the finest, and this ensemble is trained down to the last 32nd note or pianissimo, a delight to work with.

Our programme this year represents East and West. We start with *Toccata Marziale*, planned by Vaughan Williams as the first movement of a major *Concerto Grosso* for wind band, sadly never completed, but in this work he has left us an amazing kaleidoscope of ingenious phrasing, mixed metres and passages of wind chamber music. During the first World War, Grainger did military training, and observed recruits practising bayonet warfare. He began *The Power of Rome and the Christian Heart* in 1918, a "grouchy" reflection on the conflict and pacifism's struggle against universal mobilisation he wrote "it simply grumbles at the sad condition of tyranny and torturing".

We end the first half with two magnificent Japanese works in which conflict resolves into peace. *Mindscape* by Chang Su Koh I first heard at the WASBE Conference in Taiwan in 2011, I was immediately impressed and have longed for an opportunity to tackle it. In his operatic scene, *That which He taught us*, Yasuhide Ito emphasises that conflict cannot resolve hate, using a text of the Buddha in the ancient language of Pali. Our second half is altogether a welcome relief with two works based on the Dance.

Tim Reynish
www.timreynish.com



ティモシー・レイニッシュ(客演指揮)

Timothy Reynish

ケンブリッジ大学卒業後、サドラーズ・ウェルズ・オペラ管、バーミンガム市交響楽団などで首席ホルン奏者を務める。指揮をジョージ・ハースト、チャールズ・グロヴス、エイドリアン・ポルト、ディーン・ディクソン、そしてシエナのキジアーナ音楽院にてフランコ・フェラーラに学んだ。ニューヨークのミトロプーロス国際指揮者コンクールの優勝者として、英国の主要なオーケストラを指揮。1975年、王立ノーザン音楽大学の大学院指揮科の助手として招かれ、その2年後に管打楽器科の主任に任命された。同大ではオペラの指揮も手がけ、「フィガロの結婚」「魔笛」「ラ・ボエーム」「期待」やブリテンの数々のオペラを指揮した。王立ノーザン音楽大学管弦楽団とは、ベートーヴェン、ブラームス、ドヴォルジャーク、チャイコフスキー、ブルックナー、マーラーらの交響曲、リヒャルト・シュトラウスの交響詩、ストラヴィンスキーの「火の鳥」「ペトルーシカ」「春の祭典」、ヴェルディの「レクイエム」、ティベットのオラトリオ「我らの時代の子」などを指揮した。

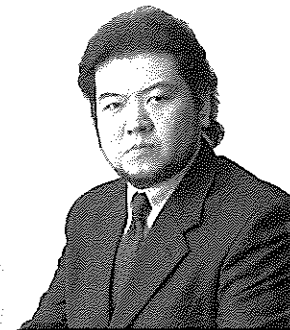
レイニッシュは、世界屈指のウインド・バンドおよびウインド・アンサンブルの指揮者として知られている。王立ノーザン音楽大学では、ウインド・オーケストラとウインド・アンサンブルを世界最高の水準に引き上げ、また著名な作曲家たちに100曲以上の委嘱新作を作曲してもらい、音楽祭にも定期的に出演した。これまでアジアを始め、カナダ、南米、ヨーロッパ、米国でクリニックや講演、客演指揮およびコンクールの審査を行っており、Maecenas Music出版のエディターも務める。国際色に富んだレパートリーを収録した商業録音は17枚におよび、最新盤は米国の沿岸警備隊バンドとの録音である。2015年はシドニー音楽院でウインド・オーケストラの客演指揮者を7週間務めたほか、リスボン音楽院、香港およびドイツで演奏会を行なった。昨シーズンは、ロンドンの王立音楽大学とトリニティー・ラバン大学、イサカ・カレッジ、シンガポールおよび米国などで演奏会を行なった。

日本へは、1995年、浜松で開催されたWASBE（世界吹奏楽大会）に際してRNCM（王立ノーザン音楽大学）吹奏楽団を率いて初来日、その折には、浜松以外でもコンサートを指揮した。そして、2年前の本グリーン・タイウインド・アンサンブルの招聘により、22年ぶり2度目の来日を果たし、以来、3回目の招聘となる。

本年、大英帝国五等勲爵士MBEを受勲する事が先ごろ発表された。

泉 良平(バトン/本学客員教授)

Izumi, Ryohpei



東京藝術大学声楽科首席卒業、同大学大学院修了。文化庁オペラ研修所第10期修了。安田生命文化財団及び五島記念文化財団の奨学生として5年間ミラノ音楽院に学ぶ。第41回全日本学生音楽コンクール優勝。第66回日本音楽コンクール第3位。ブタペスト国際声楽コンクール優勝。その栄誉によりハンガリー国立歌劇場にて「ラ・ボエーム」のマルチェッロでヨーロッパデビューを飾る。ニューヨークにてメトロポリタンオペラオーケストラと共演。

2002年宮本亜門演出「フィガロの結婚」アルマヴィーヴァ伯爵で東京二期会にデビュー以降「椿姫」「エジプトのヘレナ(日本初演)」「さまよえるオランダ人」「蝶々夫人」「ワルキューレ」「ファウストの却罰」「パルジファル」等に出演。

新国立劇場には05年「ホフマン物語」シュレーミル、「マクベス」タイトルロール、08年「軍人たち」アイゼンハルト等に出演。その他、佐渡裕プロデュース「メリー・ウィドウ」プリチッチ等、多彩な作品に出演している。

藤原歌劇団には、19年「ラ・トラヴィアータ」のドゥフォーールで初登場。日本オペラ協会には、「みづち」タイトルロール、「天守物語」朱の盤坊、「死神(魅惑の美女はデスゴッデス)」「早川、「袈裟と盛遠」盛遠、「よさこい節」純信、「ミスター・シンデレラ」伊集院忠義、「夕鶴」惣と、「静と義経」弁慶に出演し、いずれも好評を得ている。第2回上毛音楽賞受賞。第12回五島記念文化財団文化賞オペラ新人賞受賞。藤原歌劇団団員。日本オペラ協会会員。洗足学園音楽大学客員教授。群馬県出身。

R.ヴォーン・ウィリアムズ／トッカータ・マルチアーレ (約5分)

(F.L.バッティスティの校訂による原典版)

Ralph Vaughan Williams (1872-1958) / *Toccata Marziale* (1923)

Original version edited by Frank L. Battisti (2005)

P.A.グレインジャー／ローマの権力とキリスト教徒の心 (約13分)

Percy Aldridge Grainger (1882-1961) / *Power of Rome and the Christian Heart* (1953)

高 昌帥／ウインドオーケストラのためのマインドスケープ (約13分)

Koh, Chang-Su (*1970) / *Mindscape for Wind Orchestra* (2008)

伊藤康英／彼がわたしたちに語ったこと バリトンと吹奏楽のために (約9分) (日本初演)

Ito, Yasuhide (*1960) / *That which He taught us ... for Baritone and band* (2016, Japan premiere)

バリトン独唱：泉 良平

Izumi, Ryohei : Baritone

intermission

K.ヘスケス／ダンスリーズ(セットII) (約18分)

Kenneth Hesketh (*1968) / *Dancies set II* (2011)

1. ジェニーの硬貨 2. トム・ティンカーのおもちゃ 3. 心の安静 4. ピーズコッドのガリアルダ

1. *Jennie's Bawbee* 2. *Tom Tinker's Toy* 3. *Heart's Ease* 4. *Peascod's Galliarda*

A.ゴープ／クレタ島の舞曲 (約18分)

Adam Gorb (*1958) / *Dances from Crete* (2003)

1. シルトス 2. テイク 3. サマリア峡谷 4. シルタキ

1. *Syrtos* 2. *Tik* 3. *Samaria Gorge* 4. *Syrtaki*

本日のコンサートはビデオ収録されており、インターネットあるいはテレビ等にて公開されることがあり、観客の皆様が映る可能性があります。何卒ご理解いただけますようお願い申し上げます。

ティム (ティモシー・レイニッシュ氏) を今年もお招きできて嬉しい限りである。今年は、「日本初演」作品こそ含まれないが、ヨーロッパの吹奏楽を知る上で重要な作曲家の作品が含まれている。そして、プログラム冒頭2曲に、古いイギリス由来の吹奏楽作品が2曲、日本人作品が2曲、そして、ティムの親友のイギリスの作曲家作品が2曲、と、それぞれの違いを楽しむことができるものとなっている。また、イギリス人が見た日本の作品はいかなる表現となるか。このあたりも楽しみである。

共演するのが今回で3回目となるという学生もおり、グリーン・タイはいよいよ「ティム・サウンド」を極めることとなる。

ティムはリハーサルをしていて、バンドがうるさい音を出し続けようものなら、着ていたポロシャツを突如脱ぎ出す。と、そこに着ていたTシャツには、「フォルテはライト・ダイナミクス」と書かれてある。

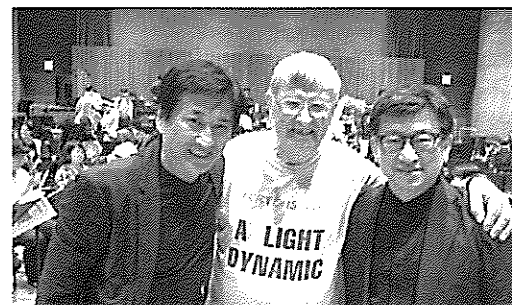
それはどういうことか。

吹奏楽ではとかく、大きな音を連続して出したがる傾向にある。すると、音楽のクライマックスが見極められなくなる。また、アンサンブルの中で際立たせたい音を強くさせるのではなく、周りを小さく演奏させることでより際立つようになる。そして、弱音を美しく奏でることで吹奏楽はより色彩的になる。

そんな「ティム・サウンド」、そして見事なプログラムを是非ご堪能いただきたい。本学の泉良平先生の素晴らしいバリトンが華を添えてくれます。

また今回も、指揮者であり、ティムの愛弟子でもある藤岡幸夫氏の多大なご協力を得ました。ありがとうございました。

洗足学園音楽大学グリーン・タイウインド・アンサンブル
企画運営責任者 伊藤康英



藤岡幸夫氏、レイニッシュ氏、筆者。レイニッシュ氏のTシャツに注目

トッカータ・マルチアーレ (R.ヴォーン・ウィリアムズ)

ヴォーン・ウィリアムズは1872年10月12日、グロスタシャーのダウン・アンブニーに生まれた。6歳でピアノと作曲を学び、7歳になるとヴァイオリンの演奏を開始している。

彼は生涯にベートーヴェンと同じく、9曲の交響曲を選んでいる。中でも「海の交響曲」は大規模なもので、構成的には、単声または多声ための器楽伴奏付きのcantataと呼ばれる声楽作品のようなものである。

イギリスの田園風景を思わせる牧歌的な作風は、イギリス国民に広く愛されている。日本では「惑星」で知られるホルストに比べて知名度は低いが、欧米では、ホルストより高く評価されている。

(2年 洞口菜々子 引用:ウィキペディア等)

ヴォーン・ウィリアムズの吹奏楽作品といえば、「イギリス民謡組曲」(1923)が知られており、この「トッカータ・マルチアーレ」も名曲でありながらなかなか演奏の機会に恵まれない。全曲を通して一貫した対位法的な複雑さのためかもしれない。

そういうときには楽曲分析をして全体をしっかりと把握するのがよいだろう。なお、この見解は、伊藤康英独自によるもので、ティモシー・レイニッシュ氏のものとは異なる。

第1小節～ 序奏

ここに全体のすべての要素が織り込まれている。

第23小節～ 提示部第1主題群

ホルネットとオーボエにより「歌うように(cantabile)」提示される。このころの軍楽隊の定石として、ホルネットとオーボエの組み合わせはしばしば見られる。野外での演奏を考慮した実用的なものだったのだろう。

第54小節～第90小節 提示部第2主題群

ユーフォニアムなどによる民謡調のメロディー。

第91小節～ 展開部

この曲の冒頭が、変ロ長調によるフォルテで開始したのに対し、変ト長調によるピアノで開始する。冒頭の序奏の主題が展開するも、主導権を握るのは第2主題となる。本来8小節であるこのメロディーは、4小節、あるいは3小節のみとなり、次第にカノンとなり(第106小節)、また縮小型(リズムが細くなる。第109小節)となり、盛り上がりを見せる。

第117小節～ 再現部

第1主題が華やかに再現(提示部では「歌うように」演奏されていたことと対照的)。第2主題は展開部にて十分に展開されたので省かれている。

第147小節～ 158小節 コーダ(終止部)

第1主題がカノンふうにあらわれる。

このような形式の中で、冒頭に低音に現れる8分音符と16分音符によるモチーフが常に対位的な展開を見せていることで、全体が複雑に見える。全体は4分の3拍子で書かれているが、実質的には4分の4拍子など、各種の拍子が現れていることも、複雑さの要因かもしれない。

この曲は1924年に大英帝国博覧会記念式典のために書かれた。これまで出版されていた楽譜は、バス・クラリネット、コントラバス・クラリネット、ソプラノ・サクソフォーン、バリトン・サクソフォーン、バス・サクソフォーン、などが取り入れられていたが、本日は、パツティステイによる原典版を採用、作曲家自身の編成を尊重しつつも、分厚くならないように配慮して演奏する。ちなみに、手書きスコアの楽器編成は次の通り。

フルート／ピッコロ、Ebクラリネット(当時の習慣に従い、2本)、オーボエ、クラリネット(ソロ(複数人)、第1、第2、第3)、アルト・サクソフォーン、テナー・サクソフォーン、バスーン(2本)、ホルン(4本)、コルネット(1、2)、トランペット(1、2)、トロンボーン(1、2)、バス・トロンボーン、ユーフォニアム、チューバ、ティンパニ、スネア・ドラム、トライアングル、シンバル、大太鼓。

なお、いずれの版を用いても楽譜にはミスが多く、演奏には慎重を要する。ティモシー・レイニッシュ氏のウェブサイトには、訂正表が載せられている。

ヴォーン・ウィリアムズの吹奏楽作品にはこのほかに、「フラリッシュ」(1939)がある。

(伊藤康英)

ローマの権力とキリスト教徒の心

(P.A.グレインジャー)

1948年、ゴールドマンバンドを立ち上げたアメリカの作曲家、E.F.ゴールドマンの70歳の誕生日とアメリカ作曲家連盟25周年を記念してこの曲は書かれた。グレインジャー自身はこの曲について「初期キリスト教徒がそうであったように、またいつの時代のどこでも、個人の尊厳は力のある支配者に抑制されてきた。(略)第一次大戦中の若い新兵達の訓練の中にもそれを感じ、私はこの曲を書いたが、この曲は『描写音楽』ではない。個人の魂がいかにかのまに無力であったかを音楽のフィーリングとして描きたかった。」と述べている。

彼自身が語っているように『描写音楽』ではない。よって弾圧や迫害を思わせる部分はない。いたって冷静に曲は進行し、静かに締めくくられる。

1918年に作曲され始め、1943年にフルオーケストラとオルガンのための曲として完成し、後にグレインジャー自身によって弦楽器なしの吹奏楽版にアレンジされた。この曲

は彼の作品の中でも最大の作品とも言える。どうもグレインジャーの理想は「管打楽器」部分が極端に肥大化した「管弦楽」であったようだ。にも関わらず、盛大に鳴り響いてカタルシスをもたらすような曲ではないところがユニークである。

グレインジャーは1882年オーストラリアのビクトリア州ブライトンで生まれ、10歳の頃、メルボルンでピアニストとしてデビュー。1901年、19歳のグレインジャーは母とロンドンへ渡り、作曲家としての才能を開花させた。1914年32歳でアメリカへ移住し翌年にはピアノ奏者としてニューヨークでデビューし、そこで終生を過ごした。彼の音楽は従来の常識的な編成にとらわれず、大編成の木管楽器での合奏や複数配置された合唱隊や打楽器のみのためのものなどの作品も残している。

(3年 佐藤隆 引用:吹奏楽マガジン、ウインドレパートリープロジェクト)

この作品には次のような主題が現れる。

冒頭のオルガン独奏(パイプ・オルガンでも電子オルガンでも構わないとの作曲家による指示)による下行する半音階の主題。

ついで3拍子を基本とする、強弱の変化が激しいコラールふうの主題。

続いてクラリネット群による半音階下行の「孤独な男」の主題。

金管が「ローマの権力」の主題。

引き続き3連符を伴う主題。

グレインジャーの作品には、「フォークソング・セッティング」つまり、民謡をもとにしたものがあり、その中には名作「リンカンシャーの花束」などがある。一方で、民謡素材によらないものの中には、若干難解なものもある。その中で最も優れた作品としてこの「ローマの権力」がある。

(伊藤康英)

ウインドオーケストラのためのマインドスケープ

(高昌帥)

2005年、A-Winds 奈良アマチュアウインドオーケストラへの委嘱作品。

本作について作曲者は次のように述べている。

タイトルの「Mindscape」は「心象風景」というような意味です。曲はパーカッションによる幻想な序奏に続き、複雑なリズム構造と常に激しく訴えかけてくる性格を持つ第1部、寡黙なまでに静的で、たゆたうように歌う第2部から成り、第2部はそれ自体がA-B-A'の3部形式の構造を持っています。全く相反する性格を持つこれら主要2部ですが、共通のモチーフによってコインの表裏のように分かち難く結び合わされています。

あるモチーフを、どこかのパートが演奏すると、その

演奏を追うようにどこかのパートが演奏し、またどこかのパートが追うように…と、輪唱するような形で繰り返されていく第1部は、まさに題である「心象風景」を表しているのではないだろうか。曲調が180度変わる第2部では、木管楽器の美しいメロディーが浮き沈みを繰り返しながら展開していく。ただその中に第1部のモチーフが見え隠れしていることにお気づきだろうか。

高昌帥は、大阪音楽大学作曲学科作曲専攻卒業後、スイス・バーゼル音楽院(バーゼル音楽アカデミー)に留学。作曲を田中邦彦とルドルフ・ケルターボーンに、指揮をヨスト・マイヤーに師事する。第1回コダーイ記念国際作曲コンクール佳作、第12回朝日作曲賞受賞、第1回COMINES-WARNETON国際作曲コンクール「イヴ・ルルー賞」受賞、平成20年度・平成24年度下谷奨励賞受賞、第19回日本管打・吹奏楽アカデミー賞(作・編曲部門)受賞。大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部教授を務める。

管弦楽、室内楽など幅広いジャンルの作品を手がけるが、特に吹奏楽の分野へ積極的に作品を提供している。高の音楽について、中橋愛生は「強靱な生命力の躍動を感じさせる」と評し、ティモシー・レイニッシュ氏は「(2011年の世界吹奏楽大会において)もっとも印象的だった作曲家の一人」と述べている。自らがルーツを持つ朝鮮の伝統音楽の要素を作品に取り入れることも多い。

(2年 水谷樹里 引用:ウィキペディア等)

高さんの作品は、これまでもグリーン・タイでは、「パンソリック・ラブソディ」や「優しい花たちへ」を取り上げてきた。また、昨年度の本学での吹奏楽コンクール課題曲クリニックでは、高氏の指揮のもと、グリーン・タイがモデルバンドとして演奏した経緯もあった。

今回は、ティム氏自身がこの曲を選曲した。昨年の来日の際に、ティム氏によるワークショップがあり、高氏の作品を取り上げたところ、みるみる表情が変わっていった。今回の演奏がどのようなものになるか、楽しみである。

また、筆者自身、日本人の吹奏楽作曲家として高氏の作品を夙に高く評価しており、それは吹奏楽曲のみならず、声楽曲にも優れた作品が多いことも、大変に素晴らしいと感じている。

(伊藤康英)

彼がわたしたちに語ったこと

バリトンと吹奏楽のために (伊藤康英)

2015年12月12日のグリーン・タイのコンサートで、同名のタイトルのバリトンとソプラノの二重唱による版の日本初演を行なった(指揮はダグラス・ボストック氏)。その版の世界初演は同年11月8日のウルム交響吹奏楽団(ドイツ/作曲家自身の指揮)であった。

今回お届けする版は、バリトン独唱版であり、昨年のクードヴァン国際吹奏楽作曲コンクールにて第3位を獲得した作品である。(なお、このときの第1位は、芳賀 傑氏。またこのコンクールは、かつて真島俊夫氏が第1位を獲得したことで知られている)。

さて、2015年のグリーン・タイでのコンサートに際し、ソプラノとバリトンの歌手手を擁することとなり、何か二重唱の小品をアンコール用に書こうと思いついた。それを指揮のボストック氏に提案したところ、アンコールではなくプログラムに入れられる曲を、との話になった。

ラテン語にテキストを探そうと思ったのだが、プログラムにすでにラテン語(キリスト教)のものは入っている、たとえば神道とか仏教にテキストをとることはできないかとボストック氏は言う。そんなとき、たまたまサンフランシスコ平和条約のエピソードに出会った。

1951年、第二次世界大戦を終結させるためにサンフランシスコ平和条約が結ばれた。敗戦した日本は、ともすると中国やソ連などに分割される場所であった。それを救ったのが、スリランカ(当時のセイロン)のJ.R.ジャヤワルダナ元大統領(1906-1996、当時は財務大臣)だった。(なお、ジャヤワルダナ氏の碑は、鎌倉大仏の脇に建っている[写真])。スリランカは、日本帝国陸軍によるセイロン島コロombo空襲を受けていたにも関わらず、「セイロンに於ける我々は、幸い侵略を受けませんでした」と表現したうえで、我々はブッダの言葉を信じている、と、「怨みは怨みによって止まず、ただ怨まないことによるのみ止む」というブッダ自身の言葉を引用し、日本に対する賠償請求権を放棄する声明を出した。今の日本があるのは、ブッダの言葉によって救われたからだ。(日本人はこのことを肝銘すべきである)。

ちなみに、ジャヤワルダナ氏は英語でスピーチしたこともあり、「怨まないことによるのみ」という部分が、「by love(愛によって)」となっていた。「怨まないこと(not hatred)」という概念は欧米では理解され難いのであろうか、仏教が欧米に紹介された当初から、「by love」と英訳されているようだ。

さて、この言葉は、もともとはブッダ自身が話していたと言われるパーリ語で書かれていたことがわかった。

パーリ語は、サンスクリット語と似ており、インドのブラークリット系の言語。しかしサンスクリット語のような文字が失われているため、現在ではローマ字を基本とした書き方をしている。つまり、ある意味世界共通とも言える。そして興味深いことに、ヨーロッパの諸言語と東洋の言葉の橋渡しをする。たとえば文法構造は、ラテン語のように、かなりの種類の品詞が格変化など変化し、語順もヨーロッパ言語と似ている。一方、ブッダの言葉は、日本へは中国語を通して入ってきており、パーリ語と同じ発音の日本の言葉もいくつかある。

さて、バリトンとソプラノによる版を世界初演した数日後の11月13日に、パリでテロが起こった。最愛の妻をテロで亡くしたフランスのジャーナリスト・アントワヌ・レリスさんのFB記事に心を打たれた。

「決して君たちに憎しみという贈り物はあげない。君たちの望み通りに怒りで応じることは、君たちと同じ無知に屈することになる。」(朝日新聞訳)

これは、ブッダが語ったことと同じことだった。宗教をこえて人が思うことは同じと感じた。

レリス氏はほとんどなく、「Vous n'aurez pas ma haine (「ぼくは君たちを憎まないことにした」)(和訳はポプラ社刊)を出版した。

翌2016年2月22日にクードヴァン国際吹奏楽作曲コンクールの募集要項が届いた。そこには「sur le thème de la paix」(テーマは平和)と書かれてあった。あのテロを受けてのテーマ設定なのだろう。ちょうど同じテーマで書いたそのメッセージを、何としてでもフランスの人たちに届けたいとの思いで、このコンクールに提出することし、要項の規定に合わせて、バリトン独唱版とした。フランス語のタイトルは「Ce qu'il nous enseigna …」。その後、2018年5月26日に最終選考会が行われ、ついにフランスにメッセージを届けることができた。その後、パリ警視庁音楽隊によっても演奏された。

余談ながらこのメッセージの続きを書いておこう。

「怨まないことで怨みは止む」とは言っても、人を怨まないことなんてなかなかできることではない。そう思っていたころ、第二次世界大戦中の静岡空襲の際に墜落したB29爆撃機のアメリカ搭乗員犠牲者の慰霊を続けておられる方に会った。「敵味方の隔てなく追悼する。慰霊、追悼なくして平和は語れない」と語っておられ、それが「人を怨まない」第一歩かと思ひ、それをもとにオペラ「ある水筒の物語」を作曲し、つい先ごろ初演された。そこにこの「彼がわたしたちに語ったこと」のほぼ全編を引用し、オペラ中でもバリ語で歌唱される。

本日の歌い手の泉 良平本学客員教授は、2004年、2017年に私のオペラ「ミスター・シンデレラ」(高木達台本)の日本オペラ協会による公演に出演していただいた。15年1月には、本学シルバーマウンテンで初演した私のオペラ「起承転結」(和合亮一脚本/演奏会形式)にも出演いただき、先月は日本オペラ協会主催の歌曲コンサートにでも私の歌曲を歌ってくださっている。そして、2015年のこの作品の初演もお願いしており、それはYouTubeにも紹介されている。本日の日本初演もお願いすることができたご縁を嬉しく思っています。

(伊藤康英)

原詩と対訳

sabbe sattā bhavantu sukhittattā.
生きとし生けるものすべて幸せでありますように

akkocchi maṃ avadhi maṃ
罵られた。傷つけられた。
ajīni maṃ ahāsi me
倒された。奪われた。

ye ca taṃ upanayhanti
…と怨んだら、

veraṃ tesaṃ na sammati
怨みが消えていくことはない。

akkocchi maṃ avadhi maṃ
罵られた。傷つけられた。
ajīni maṃ ahāsi me
倒された。奪われた。

ye ca taṃ nupanayhanti
…と怨まなければ、
veraṃ tesūpasammati
怨みは消えていく。

na hi verena verāni sammantīdha kudācanaṃ
実にこの世では、怨みを怨みで返したら、ついに怨みの止むことはない。

averena ca sammanti esa dhammo sanantano
怨まないことで怨みは止む。これが永遠の真理。

ye keci pāṇabhūt'atthi
生きとし生けるものすべて
tasā vā thāvarā vā anavasesā
怯えているものも 強がっているものも
dhīga vā ye mahantā vā
長いものも 大きなものも
majjhimā rassakāṇukathūla.
中くらいのものも 短いものも 小さいものも

Diṭṭhā vā ye ca addiṭṭhā
見えるものも 見えないものも
ye ca dūre vasanti avidūre
遠くに住むものも 近くに住むものも
bhūtā vā sambhavesī vā
すでに生まれているものも これから生まれるものも
sabbe sattā bhavantu sukhittattā.
生きとし生けるものすべて幸せでありますように

sādhu, sādhu, sādhu
良きかな、良きかな、良きかな。

(「ダンマバダ(法句経)」、「スッタニパータ」より/伊藤康英訳)



ジャヤワルダナ(元スリランカ大統領)氏碑

ダンスリーズ(セットII) (K.ヘスケス)

2000年にヘスケスが初めて吹奏楽のために書いた「ダンスリーズ」(グリーン・タイでは、2017年に演奏)の続編と言えるもの。

17世紀に英国で出版されたプレイフォードの「ダンシング・マスター」という民謡や伝承曲を集めた舞曲集に由来する。

この作品では、前作よりもメロディーがより抽象化されたり、遠くから響いてきたりするなど、より拡張されており、素材が自由に扱われている。複調(異なった調性が同時に現れる)も用いられ、和声もより多彩である。

「ダンスリーズは成長した!」との作曲者の言葉。

第1楽章は、基本的にト長調2分の2拍子。

第2楽章も基本的にはト長調8分の6拍子。しゃれたアクセントが、踊りの雰囲気醸し出すメロディー。この楽章と、次の楽章は、作曲家自身によるメロディー。

第3楽章は、ニ短調(あるいは二音の旋法)4分の3拍子。

第4楽章は、ト長調4分の3拍子。「ガリアルダ」と呼ばれる急速な踊り。

ケネス・ヘスケスは1968年リバプール生まれ。ロンドンの王立音楽大学でエドウィン・ロクスバラ、サイモン・ベインブリッジ、ジョセフ・ホロヴィッツに作曲を師事。在学中からすでにロイヤル・リバプール・フィルや他のグループより作品を委嘱、初演。オーケストラ作品、室内楽曲のほか、イングリッシュ・ナショナル・オペラ・スタジオのために室内オペラも作曲。吹奏楽のためには、2000年の「ダンスリーズ」以来、「マスク」(2001年初演)、「ディアギレフ・ダンス」(2003)、「ヴランヤンカ」(2005)を作曲。

(伊藤康英)

クレタ島の舞曲

(A.ゴープ)

本日の客演指揮のティモシー・レイニッシュ氏の三男ウィリアムさんは、優秀な医者でもあったのだが、2001年にピレネー山脈での登山にて逝去された。ウィリアムさんを追悼するため、ティモシー、ヒラリー御夫妻は吹奏楽作品の委嘱活動を続けており、その数は20を超える。また昨年演奏した「ロム・アルメ(武装した人)変奏曲」(C.マーシャル)もその1曲である。

「クレタ島の舞曲」は、古代のギリシャ神話で知られるギリシャのクレタ島の踊りの音楽をもとにした、「人生での吉事」を4つの楽章に描き出したもの。

第1楽章「シルトス」は、牛頭人身の怪物ミノタウロスを描く。ミノタウルスは、若者や女性を毎年いけにえにすると思われ、過酷で冷酷な性格の音楽。

第2楽章「テイク」は、若い女性のしなやかな動きに基づく優雅なダンス。またときに粗さも持ち合わせる。8分の5拍子で書かれ、レイニッシュ氏は、「この楽章では、演奏者全員があ、脱穀場のクレタの農民のような拍(パルス)を感じなくてはならない」と述べている。

第3楽章はゆっくりとした4分の7拍子の暗い雰囲気のある音楽。壮観な眺めのサマリア峡谷を下って行き、リビア海にたどり着く。

遠く離れた舞台裏のファンファーレに続いて、最終楽章は、傍若無人にふんぞり返ったトランペットのメロディーに始まるギリシャの踊り「シルタキ」。音楽は速度を増し、無秩序なまでのお祝いの音楽、(その一方で、第1楽章のもののタウロスの幽霊が、ちょっとだけそのパーティに参加するのだが)、その無秩序な乱痴気騒ぎで幕を閉じる。

アダム・ゴープは現代の英国を代表する吹奏楽の作曲家。ウィンド・バンドのための第一作(メトロポリス)(1993年)はきわめて刺激的で難度の高い作品で、1994年にウォルター・ビーラー記念作曲賞を受賞した。英国王立音楽院のウィンド・オーケストラのために書かれ、エドワード・グレッグソンによって初演された。その後も「ポスト・バーンスタイン」的ともいえる華麗な序曲「アウエイデー」(1996)、ユーフォニアム協奏曲(1999)、「イディッシュ・ダンス」(1998)、「告別」(2008)などを発表。そのほか経験の浅いばんだのために、「バーミューダトライアングル」、「ブリッジウォーター・プリーズ」、「ろうそく行列」、「丘を越え、谷を越え」、「アイネ・クライン・イディッシュ・ラグミュージック」、「小さな木の兵隊たちの行進」など数々の曲を作曲している。現在、マンチェスターの王立ノーザン音楽大学の作曲科主任を務める。

(伊藤康英)



2018年7月1日公演より

洗足学園音楽大学グリーン・タイ ウインド・アンサンブル

Senzoku Gakuen College of Music Green-Tie Wind Ensemble

学園の色の一つ「緑」を冠した吹奏楽団。2009年、作曲家・伊藤康英(本学教授)と共に始動。作曲家の視点を交えた楽曲分析やこだわりの選曲が特徴。これまでに、ダグラス・ボストック、ティモシー・レイニッシュ、藤岡幸夫、秋山和慶、増井信貴、本名徹次といった名だたる指揮者を招聘。海外交流も積極的に行い、台湾、シンガポール、韓国にて交流演奏会を持つ。2016年には沼津(静岡県)公演を行った。2017年、WMC国際指揮コンクール予選マスタークラスのモデルバンドを務めた。藤岡幸夫氏がナビゲーションを務めるBSジャパン「エンター・ザ・ミュージック」にもたびたび出演。その他、福島県の伊達市歌レコーディングなど、活発な活動を行う。指導陣には、これまでに近藤久敦(本学講師)、仲田守(本学元講師)らをはじめとして、多くの指導教員の指導を仰ぐ。

[Concertmistress]	寺本 理菜					
[Inspector]	飛澤 伽奈	廣野 健太	須藤 愛佳			
[Flute]	坂上 葉*	坂口実優	城野 裕子	甲斐 真琴	加藤 美咲	佐々木美緒
	瀬川 結未	谷野 菜月	藤田 真生	村松 紀親	佐藤 亜紀	足立 柚寿
	谷口 愛海					
[Oboe]	朝日 可奈子	伊織 鈴奈	伊藤 楓子	末松 美香	佐藤 千尋	
[Clarinet]	釜田 早希	寺本 理菜	中林 真優*	杉浦 宝瑠	田代 三葉	松井 泰介
	石橋 優安	齋藤 要助	染谷 優希奈	橋本 治樹	洞口 菜々子	宮川 愛莉果
	山本 夢	原田 優 [♪]	石井 綾菜 [#]			
[Bassoon]	大内 麻央*	塩沢 七穂	高橋 遥			
[Saxophone]	金子 由希絵	佐藤 志織	渋谷 優花*	菅野 佑香	飛澤 伽奈	松下 沙世
	山本 康平	網本 真子	合田 桜花	望月 崇賜	加福 夏子	國澤 美空
	船木 彩香	本間 美桜	谷口 綾乃			
[Horn]	佐藤 駿*	末永 廉	奥林 佑也 [♪]	岡林 絵美 [#]	鈴木 彩 [#]	増永 梨花子 [#]

[Trumpet]	岸 実咲	栗山 愛*	國米 晴貴 [♪]	藤井 綺花	松本 奏太郎	大川原 成美
	山内 菜摘	神山 巧弥	草野 あんず	居石 まどか	水谷 樹里	
[Trombone]	荒谷 悠斗*	石田 薫	鶴飼 杏	佐野 陽歩	南崎 直子	盛喜 麻衣
	山口 智代	津吹 亮汰	謝 慕揚 [♪]			
[Euphonium]	丸山 奈央*	高原 百合香	本谷 梨香	谷田 果奈美		
[Tuba]	島 守礼*	廣野 健太	加藤 惇	長房 美久	岡田 侑也	
[Contrabass]	中川 綾音*	伊藤 令華	江頭 輝 [♪]			
[Percussion]	須藤 愛佳*	辻本 智裕	廣田 雅也	山田 祐佳	青柳 はる夏	金 蘭花
	鈴木 脩平	高山 かほ	松田 紗枝	山本 晃弘	東 廉悟	小栗 栖 未久
	佐竹 絵磨	鈴木 美音	福光 真由			
[Piano]	高城 美希 [♪]	友野 美里 [♪]	西村 京一郎 [#]			
[Harp]	山内悠里佳 [#]					

[#]…演奏補助要員 [♪]…賛助 […]団長 *…パートリーダー

合奏指導教員 伊藤 康英/近藤 久敦

企画運営責任者 伊藤 康英

アカデミックコーディネーター 福田 昌範

グリーン・タイ ウインド・アンサンブル最新情報やメッセージをSNSで続々配信!



Facebook



Twitter



Instagram

今後のグリーン・タイ ウインド・アンサンブルの演奏会

2019年12月10日(火) 18:30開演 (18:00開場)

会場・洗足学園前田ホール 指揮:ダグラス・ボストック 音楽祭バス¥1,000(全席自由)

ベスト・オブ・ボストック〜吹奏楽の古典名曲を名匠・ボストックと Vol.10
Best of Bostock, Douglas Bostock Presents Masterworks for Winds Vol. 10

「ボストック氏がこよなく愛する作曲家たちへのオマージュ」と言ったらよいだろうか、ネリベル、グレインジャー、ホルスト作品は、必ずといって良いほどプログラムに収める作曲家、ちなみに、ネリベル作品は、このグリーン・タイとはかつて「トッカータ・フェローチェ」の日本初演、「S.S.S」の世界初演も行った。そして、スパークと松下功氏は、親しい友人でもある。昨年惜しくも急逝された松下功作品は、ボストック氏の依頼により吹奏楽版が作られた。そしてグリーン・タイ責任者の伊藤康英の作品を。聴き逃すことができないこのプログラムをぜひ、お楽しみに。

プログラム

V.ネリベル/アンティフォナーレ 金管六重奏と吹奏楽のために 伊藤康英/ピース、ピースと鳥たちは歌う
 P.A.グレインジャー/コロニアル・ソング G.ホルスト/ハマスミス 吹奏楽のための前奏曲とスケルツォ
 松下功/天空の祈り〜とうとき命に〜 Ph.スパーク/宇宙の音楽

～またのご来場をお待ちしております～

「洗足の吹奏楽」
を聴こう!

6月 29日(土) 18:00- ブルー・タイ ウインド・アンサンブル演奏会
 7月 5日(金) 19:00- フレッシュマン・ウインド・アンサンブル演奏会
 7月 6日(土) 19:00- 洗足ウインドシンフォニー演奏会
 7月 23日(火) 19:00- 吹奏楽指導者マスタークラス演奏会



洗足学園音楽大学

ひと、音楽、未来、世界をつなぐ。

洗足学園音楽大学は、音楽の学びと実践を通じて、
豊かな社会づくりに貢献します。

